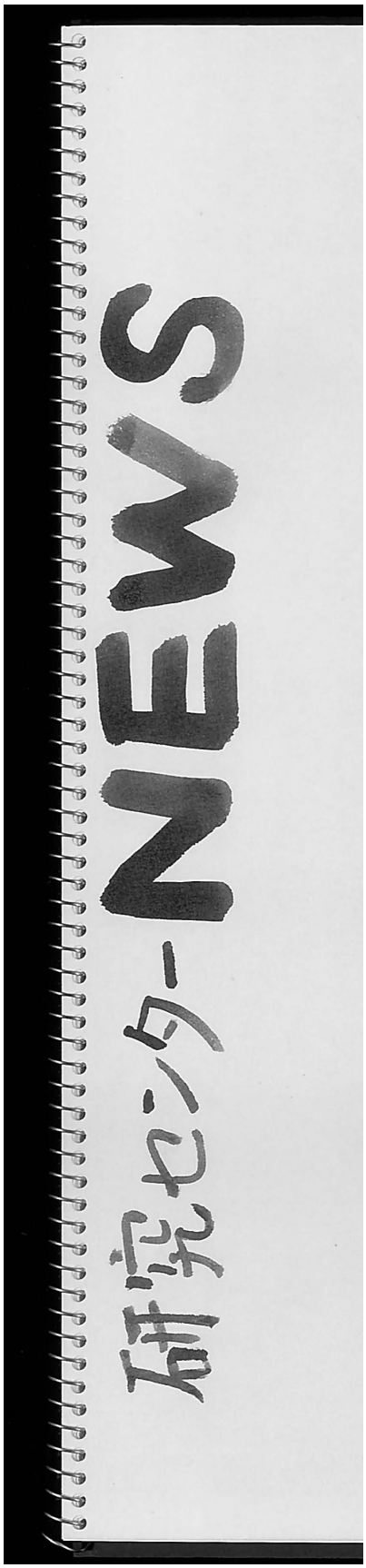
研究センターニュース第80号




特定非営利活動法人
地域と協同の研究センター

巻頭エッセー

# 「せいきょう醤油」が意味するのも

元愛知学泉大学 家政学部 教授
井関　道夫

数日前の中日新聞に「ギョーザ事件」に関連して「原点薄らぐ生協活動」と云う見出しで生協に対する叱責の記事(10/20)があった。その中に(40年前の)「せいきょう醤油」という言葉をみいだし、懐かしさと一種の忘れ物の「ときめき」を感じた。

いまどき1升ビン入りの醤油なんて見る事も出来ないが、当時は大抵の醤油が1升ビンで店頭に並んでいた。「生協しょうゆ」は多分2リットルビンで、このとき初めて2リットルビンなるものがあることを知ったし、濁っていないか？表面に白い粉は浮いてないか？などよく見つめたものである。

若い世代の人にとっては皆目何のことかと見当もつかないかもしれないが、当時の静岡生協の組合員が中心となり、メーカーと協力して「天然醸造・人工甘味料不使用」なる醤油を作り出し、生協ブランドとして売り出した商品である。生協組合員が自分たちの商品を作ったということが非常にうれしかった。表面に白い粉といったのは、カビである。天然醸造の、まさに手作りの醤油であるからカビの発生のおそれはある。もともと醸造学には馴染みがあったから、そんなことは気にならなかった。カビが気になれば漉せばいいわけで、醤油は本来カビ（酵母）の力を利用したものであり、わけのわからぬ人工添加物よりよほどましである。今ならカビでも生えようなら大変であるが、そのことよりも「必要なものが自分で作れる」そして「商品ができる」という実感こそが感激であった。

この時代は列島改造計画が始まり、ファミレスなどの外食産業が芽生えたころでもある。また、食品工業の著しく発達した時代でもあった。私は、特に消費者運動や生協運動に関心があったわけでもなく、大学生協のお世話になりながら自分の生活を築くのに精一杯であった。四六時中大学構内にいる理系の研究者にとっては、買い物をする時間もなく、文具以外の生活物資を身近に手に入れるのは容易なことではなかった。大学生協から派生して「名勤生協」が生まれ、利用班を利用しながら生活をした時代でもあった。

自分たちで必要な物を作り、それをみんなに分け与えるということは非常に価値のあることで、生協運動の原点でもある。大学研究者は物事の原理や仕組みを理解し、それらを応用して新しいものを生み出すことを最高の喜びとしているし、学生にも創造すること、生み出すことの面白さを教えている。

生み出すものが何であれ、自分の手で努力して作り出すのは真の喜びであり、価値のあるものである。そのためには、自らの意欲と努力が必要である。今日の学生に対しては、もっと学問に好奇心と興味を持って学んでもらいたいと思う。

「生協商品」についても、右から左へのブランド交換が多く、真のオリジナル商品が非常に少ないは生協関係者として悲しいことである。これぞ「生協商品」、これが「私たちの生活協同組合」と胸を張って云える様にしたいものである。（了）

（地域と協同の研究センター理事）

# 「子どもと一緒にスローフードを見直そう」親子料理教室の報告会　開催報告

**日　時　：　2008年9月19日（金）13:00～14:30**
**場　所　：　生協生活文化会館　4階ホール　　地下鉄本山駅下車徒歩2分**
**参加者　：　16名　（男性5名・女性11名）**
（めいきん１・みえ２・みかわ２・ぎふ２・パネル世話人５・報告者２・事務局２）

**地域と協同の研究センターで2006～07年度にかけて、会員がすすめる調査研究の委託事業を行い、2008年2月末には、報告をまとめていただきました。**

**その中で、今回は「子どもと一緒にスローフードを見直そうー食品の知識を深めようー」というテーマで取り組まれた、東海学院大学の鷲見孝子先生のグループの報告会を、食と農パネル主催で開催致しました。**

**七夕・お月見・クリスマスという日本の行事に即した献立で親子で調理実習したことをもとに、食のいろいろをご紹介いただけた報告会でした。**

【鷲見孝子先生】

スローフードの考え方にもあるように質のよい食材として、地域の特産物を見直し、これを使って親子で料理を作る教室を開催し、この教室での体験を通して、食材の栄養特性や機能性ばかりでなく生産の歴史や文化などの情報や「食べ物」の大切さを伝えていきたいと思う。さらに、「出来上がった料理を一緒に食すること」で参加者同士の「和」を広げるとともに「おいしく食することができる」ことのすばらしさに感謝することができればと考え、企画を立てた。（報告前文より）

パワーポイントのスライドを中心に、親子料理教室の内容について詳しくご紹介いただきました。調理実習内容設定の条件としては、岐阜県の食材・子どもができる作業・行事食の3点を挙げられました。食材の観察や学びを通して、子ども達の食への関心を引き出しておられる様子に、参加者一同興味津々の会となりました。

泥つき、葉つきのにんじんや里芋、根がついた枝豆の観察をし、洗ったり、重さを量ったり、白玉をこねることなどは、経験のない子どもがほとんどで、楽しく有意義な時間になったそうです。

おいしいにんじんの見分け方を実習で学んだり（おいしいにんじんは水に沈みます）、9種類の豆（小豆・金時豆・紫花豆・白花豆・大豆・うずら豆・ひよこまめ・大福豆・レンズ豆）から枝豆のおじいさんを考えたり、楽しみながら食材について知る機会となった料理教室でした。

＜親子料理教室プログラム＞
★１回目：七夕
　地元の食材の知識を深める
★２回目：お月見
　旬の食材のおいしさ発見
　お月見について学ぶ
★３回目：クリスマス
　地元の食材を使ってパーティー

子ども用の包丁を準備したり、調理作業台の高さを工夫したり、会場の飾りを工夫したり、アシスタントの学生を配置する等のさまざまな配慮のもと、料理教室を組み立てるご苦労もあったとのことですが、実施後のアンケートによれば、「お子さんが料理作りに関心をもつようになった」「実習した料理、資料を参考に料理を作った」「食べ物について話すきっかけになった」「行事に関心を持つようになった」という回答が見られ、体験を重ねることは、自宅で料理を作ろうとする意欲につながるのではないかとの報告がありました。

また、ススキを飾り三宝に団子をのせお供えをするお月見の料理教室では、喜んでススキを持ち帰る子どもたちの姿が見られたとのことです。

日本の伝統的な行事を食文化と共に伝承したいという鷲見孝子先生の熱い思いの伝わる報告でした。

クリスマスパーティーでは、親と子どもそれぞれのグループで調理を行うことにより、それぞれの触れ合う機会を作られました。協力して調理をすることで、参加者の輪も広がったようです。

【お月見のお祝い飾り】

【クリスマスパーティー】

クリスマスパーティーのメニュー

- タワーサンド　カナッペ風
- ミートローフ
- コロコロポテト
- キャロットスープ
- クイックケーキ
- フルーツカクテル

報告の後、参加者全員が一言ずつ感想や意見を述べました。地域で食育に関わる方も多く、非常に参考になったとの感想が出されました。キッズクッキングの取り組みをしている生協からは、「子どもたちが、食材の買い物を生協のお店でするところから始めることもあります。」という紹介もありました。

「料理教室（イベント）の成功には下準備と後片付けが重要ですね。」との意見も出され、鷲見先生とご一緒に研究に関わられた東海学院大学教授の山澤和子先生からは、「こういう取り組みには信頼がとても大切です。心に余裕がないとやってはいけないということもよくわかりました。」とのお話もありました。

鷲見先生のグループは、第二期研究奨励にも応募され、助成が決定しています。第二期の取り組みとしては、地域の特産農産物の収穫時期とお正月やひな祭りなどの伝統行事を関連付けた料理教室を開催される予定です。

【お月見のお祝い飾り】

食と農のパネルとしては、今回の研究報告を参考に、各地でさまざまな取り組みが広がることを期待しています。また、各地の取り組みについて情報を収集したいと考えています。ぜひ、情報をお寄せください。

なお報告の内容は、第一回研究奨励助成報告集に掲載していますので、ぜひご覧ください。

文責：伊藤小友美（事務局）

# 「あってほしい地域担当者の仕事像」を話し合うおしゃべりパーティ

フォーラム　生協職員の仕事を考える(9/13)

２００７年度「職員と組合員の接点～担当者の仕事を考える」パネルは、「フォーラム生協職員の仕事を考える」と名称を変更し、２００８年度は組合員のみなさんにいろいろお聞きしたいと「あってほしい地域担当者の仕事像」を話し合うおしゃべりパーティーを開催しています。９月１３日には、第１回のおしゃべりパーティーをコープぎふの組合員さんに集まっていただき、開催しました。以下、その様子を紹介します。

## 1.　おしゃべりパーティーの目的

２００７年度は、東海の各生協地域担当職員を招いて、その職員のとっている行動についての思いや考え方を聞いてきました。利用が増えている担当者は、組合員さんに自分を開示することを心がけ、組合員さんとの関係作りに、日常的に心配りをしていることがわかりました。でも、それはあくまで担当者の側（組織としての生協の側）からの見方で、それが本当に組合員さんの望んでいるところだったのでしょうか。今回、共同購入や個配を利用している組合員さんに集まっていただき、組合員さんから見た「あってほしい地域担当者の仕事像」をおしゃべりしていただく中で考えたいと、この公開企画を計画しました。

## 2. おしゃべりパーティーでの組合員さんの声から

３０名ほどの参加があり、３グループくらいに分かれておしゃべりしました。その中であった組合員さんの発言の一部を紹介します。

●昔の担当者がまた、担当になって「そういえば最近これ買わないよね？」と声をかけてくれた。そういう問いかけがうれしかった。岐阜には親戚もいないので、此処にもつながっている人がいると思うとうれしくなる。

●昔の担当者は商品知識も豊富で、お勧めをされるとついつい買ってしまっていたが、次の担当者には合わなくて、だんだん買うものが少なくなって、今はステーション利用になっている。ステーションにいっておしゃべりしまくっていてそれが楽しみになっている。

●クリスマスの時のサンタ企画はよかった。遊び心を持った企画はうれしい。今は担当者が忙しそうでそういうのはもう無理かなと思う。お手伝いキッズの取り組みは、小さい子どもと子どもをもった人にすごく好評だったが、今年もあるかと期待しているとやらないようで、そういう楽しい企画はやってほしい。

●共同購入が井戸端会議の場だったが、失われたつながりあいの場に、生協がなればうれしい。少子高齢化の中で必要な場だと思う。子ども１１０番も声を出したら生協で取り組んでくれて、すごくうれしかったが、そういうことの必要ない社会をつくっていきたい。

●最初は男性の配達で荷おろし場に行くのが楽しみだった。女性に代わった時にがっかりした。女性の配達になった時に、生協に見放されたような気がした。手を抜きだしたとも感じた。そのように思った背景として、一人班はダメと言われ、いやな思いがあった。

●共済キャンペーンの時には、訪問や電話がある。「数字に追われているのでは‥」と考えてしまう。７月２０日までにと言われるが、共済は組合員自身の為、家族の為のものであり、このように言われると職員（自分）の為と受け止めてしまう。普段のコミュニケーション、日頃の人間関係が大切ではないか。

●商品を真ん中のおしゃべりはどうなっているのか。体験談があれば、実感がわく。そういう話が聞ける担当だとラッキーと思う。そうでない人で通り一遍の話では、物足りない。また、聞きたいことがあって聞いても、調べてきますという返事ばかりでは。

文責：地域と協同の研究センター　大島

# 汚染米

## 心を込めて、安心安全で美味しい米を作っている私にとってこれほど心外なことはありません

**野田輝己（農家・名古屋市守山区）さんに聞く**

### ■□ 食への不信 □■

ここ最近、食への信頼を揺るがすニュースのない日がありません。去る9月19日、私は農民連として食健連と一緒に東京の農水省へ‘MA(ミニマムアクセス)汚染米流通抗議緊急要請行動’に参加して来ました。その最中に太田農林水産大臣辞任は、まさかの「責任を取って辞任」ではなく、福田総理と同じく「放り出して逃げ出す」みじめなところに遭遇しびっくりしました。

### ■□ 農業のよろこび □■

私は、３百年以上続く専業農家です。名古屋市の認定農家として、家族4人、守山区でトマトや米を作っています。田圃は江戸時代からそのままの姿を残しています。

9月初めには、小学生以下の子ども達25名、お母さん10名で、自然観察会と稲刈り体験をしました。連日の雨でぬかるんでいる田圃で、子ども達とマンツーマンで10株ずつ稲を刈りました。刈り取った稲わらは、お母さん達が縛ってはざに掛けます。2アールでしたが、一時間半くらいで、どろんこになりながら完了しました。

### ■□ イチョウウキゴケ　カヤネズミ □■

自然観察会では、環境省のレッドデータブックにおいて絶滅危惧に選定されている生物がたくさん観察されます。

イチョウウキゴケは、二叉状に分枝する葉状体がイチョウの葉に似ている、日本で唯一、水面に浮遊して生活している苔類です。

カヤネズミは日本で一番小さいネズミで、主に休耕田や河川敷などの、背丈の高い草原に暮らしています。稲刈り体験中に、飛び出して来て大騒ぎになりました。可愛い顔にみんなワイワイガヤガヤ！「レッドデータあいち動物編」（愛知県2002）では「絶滅危惧Ⅱ類」に指定されています。イネの葉を利用し、地表から1mほどの高さに直径10cmほどの小さな球形の巣を作ります。彼らも、野田農場の大切な一員です。田圃の排水口からちょこっと顔を出す仕草は愛くるしいものです。その他、ナゴヤダルマガエルやクサガメ、キツネも顔を出します。

### ■□ いのちをいただくこと □■

お月見には、タイマツをたいて、自家栽培のそばで月見蕎麦を食べ、自家製米粉で月見団子もお供えし、いただきました。

自然の中で、いのちを育み、そのいのちを大切にいただきたいと私はいつも考えています。

今年初めて参加された方からは、「とても楽しいひと時でした。そば粉100％のおそばは格別でした。子ども達の食べっぷりにびっくりでした。私は蕎麦湯の美味しさに感動しました。」という感想が寄せられました。

### ■□ これからも □■

一方で、くらしの問題は年金、医療、食と農業、ワーキングプアと格差拡大、投機とエネルギー高騰、はては地球温暖化抑止など、さまざまな困難に直面しています。国民の不安は増すばかりです。

汚染米流通の元凶MA米は『義務』として毎年76万トンも、必要もないものを輸入させられています。

汚染米が、食用米として老人施設や病院などですでに使われていたこと、日本酒や菓子の材料としても使われていたことに唖然とするばかりです。心を込めて、安心安全で美味しい米を作っている私にとってこれほど心外なことはありません。今年の収穫高は102の豊作、10万トン過剰と農水省は発表しましたが、MA米を止めればいいことだと私は思います。

燃料や資材等さまざまなものの高騰の中で、自然を守り、自給率向上の一翼を担い、日々、農に取り組む私たちの思いを多くの人に知ってもらいたいと思っています。

文責：伊藤小友美

# 地域と協同の研究センター『第１回研究奨励助成報告集』が完成

地域と協同の研究センターでは、２００６年度に会員による活動を促進し、活発な調査・研究活動がすすむよう、３つの領域（食と農、地域福祉と市民協同、組合員と職員の接点）で会員からの調査・研究の提案を募集しました。応募は１１件あり、これらすべてを委託調査研究とし、２００６年１２月から取り組み始めていただき、２００８年２月に８件の委託者から報告を提出いただきました。今回、この調査研究の報告をまとめ、報告集として発行しました。

## 1. 第1回研究奨励助成報告集の内容

各領域ごとでの報告のテーマは下記のようになっています。

**「食と農」の領域**

①食の実態調査を通して、これからの食卓を考える－食のこだわりを探る－
②子どもと一緒にスローフードを見直そう　－食品の知識を深めようー
③食育絵本作成

**「地域福祉と市民協同」の領域**

④不安と安心
⑤デイサービス紅梅のワーカーズ食に関わって見えてきたこと
⑥市民自信の手による福祉のまちづくりに関する研究－市民による福祉資源の形成と工夫－
⑦豊橋市岩田地域で生活創造事業の可能性を探る－協同のあるまちづくり－

**「組合員と職員の接点」の領域**

⑧コープぎふの「おしゃべりパーティー」研究

## 2. 報告集から

報告の中で、「食の実態調査を通して、これからの食卓を考える　－食のこだわりを探る－」の一部を紹介します。

岩村暢子の食卓３部作に触発されて始まったこの「ごはんたべよ一会」の食卓調査であるが、岩村の著書に現れるような壊れた食卓とは無縁の結果となった。

岩村の５年間にわたる１１１人、２２３１食卓から導き出された今の食卓の危機的な状況については「そういう家庭も、なかにはあるでしょう！！」としかいえない。いまどきの主婦の食卓はどうなっているのだと、この本を読んで「若い主婦の作るすべての食卓がコンビニ弁当やカップめんばかりだ」のように認識されるのは、幼児虐待の悲惨な事件が報道されるたびに、となりの○○さんちの子どもも虐待されているのではないかと、注目するような短絡的な話である。

岩村の著書をよんで「現代主婦の食事情」について理解できたと考え、現代主婦の食卓について憂える前に、自分自身の食卓を一度考えてみてほしい。ある日の夕食だけを取り出して「これがだめ」「言ってることと違う」と詰問されても、「たまにはそんな日もある」としかいえない。食生活とは連続した行為である。食についてそれだけを、目的に暮らしているわけではない。たまには昼食抜きでがんばらねばならないときもある。１週間くらいの長い間隔で、「今日の昼はよくなかったから明日は野菜たっぷりで、時間をかけてご飯食べよう」とか、余裕を持って考えて暮らしている。

「外食が多い」とか「出来合いのお惣菜が食卓にならぶ」についても、いまどき「洗濯機を使うこと」「既製品の衣料品をきせること」については誰も何も言わないのに、食の分野に限り声高に非難されるのはなぜか？食について「こうあらねばならぬ」ことについての整理が必要である。（報告集３２ページ）

第１回研究奨励助成報告集は、頒布価格１３００円で希望の皆様のお届けします。

文責：地域と協同の研究センター　大島

# 『2007年度地域福祉を支える市民協同パネル報告集』

編集　地域福祉を支える市民協同パネル世話人会

2006年度第3回東海交流フォーラムの分科会を受け、テーマを「地域福祉を支える市民協同」に絞り込み、①家族はどうなっているか、②地域はどうなっているか、③その中で地域福祉を支える市民（とその協同の組織）の役割はなにかを、各地域で実践している皆様に報告いただき学んできました。今回、そこで報告いただいた内容をまとめ、報告集として発行します。

報告書は次のような内容を掲載しています。

**第1回 “くらしの実像に迫る”**

- ▸ある高齢者の死にかかわって　篠原豊郷（めいきん生協在宅福祉センター）
- ▸生協“相談室”に寄せられる相談から見える暮らしと「家族」
  森川英俊（生協・くらしの相談室）
- ▸子育て支援の道を選んだ理由　内田由美（ぎふ子育て応援ステーション）
- ▸民生委員活動をとおして知る人々のくらし
  佐藤尚子（地域と協同の研究センター）

**第2回 “地域の実態に迫る”**

- ▸ボランティア配食グループ「月木会」の名古屋市千種区での取組みから　溝口弘子（月木会）
- ▸グループホーム“かがやき”の5年と地域とのかかわり　小林一二（(有)かがやき・グループホーム「かがやき」）
- ▸地域の実態に迫る　松下紀夫（東郷町社会福祉協議会）
- ▸私の地域:　三重県名張市（有我惠）、 名古屋市南区（山崎すず代）、 愛知県小牧市（松浦明美）

**第3回 “地域福祉を支える市民協同～担い手づくり”**

- ▸【基調講演】住民参加のまち育て　延藤安弘　（NPO法人まちの縁側育み隊代表理事・愛知産業大学大学院教授）
- ▸三重の「地域の集い」から見えてきたこと　有我　惠
- ▸NPO法人自立支援グループ「やまびこ」　河合信子
- ▸くらしを支えあう地域ネットワークづくりの中で気づいたこと　生田美穂子

**【講評】「地域福祉を支える市民協同」研究パネルをふり返って**

小木曽洋司（地域と協同の研究センター常任理事、中京大学現代社会学部准教授）

小木曽洋司先生による講評の一部を紹介します（巻末に掲載）。

「最後に、生協と市民協同の関係について考えておきたい。

細かくは言及できないが、生協の事業が市民協同の福祉活動の出発点における経済的基盤に少なからずなっている。それ以上に、ボランティア組織であれ、NPO法人になった組織であれ、その基盤になっている人間関係もまた生協が媒介になっていることも多い。その意味で、生協の商品事業は市民バンク的な役割をもっている。

このことを活動している人たちから考えると、生協も大事なアイデンティティのひとつであるが、他の組織と連携したり、あるいは自ら組織化したりしているわけで、そのような組織の活動にもアイデンティティを感じている。複数のアイデンティティが生まれつつあるように思う。そのことがまた生協の将来を考える財産にもなる。

考える材料として一つの試論を提起しておきたい。それは生協の福祉関連の事業についての考え方についてである。各報告が述べているところを考えると、生協は「困窮者」を「助ける」という発想から離れて、そうした人たちの能力を組織化することを目的とする事業をすべきではないだろうか。組合員がボランティア組織やNPO法人を立ち上げ、高齢者や支援を必要とする人たちと生活を組み立てなおす活動をする。それをどう援助し、活動の一翼を担えるかを模索するのである。（中略）

いずれにせよ、現代社会は人とゆっくり会える時間も場所も奪われているから、市民協同によるつながりという「つむぎ直し」は今までにはない冒険的な試みになるだろう。しかし冒険は孤独なものでなく、孤独から脱するための楽しいもののようである。」（報告集61ページ）

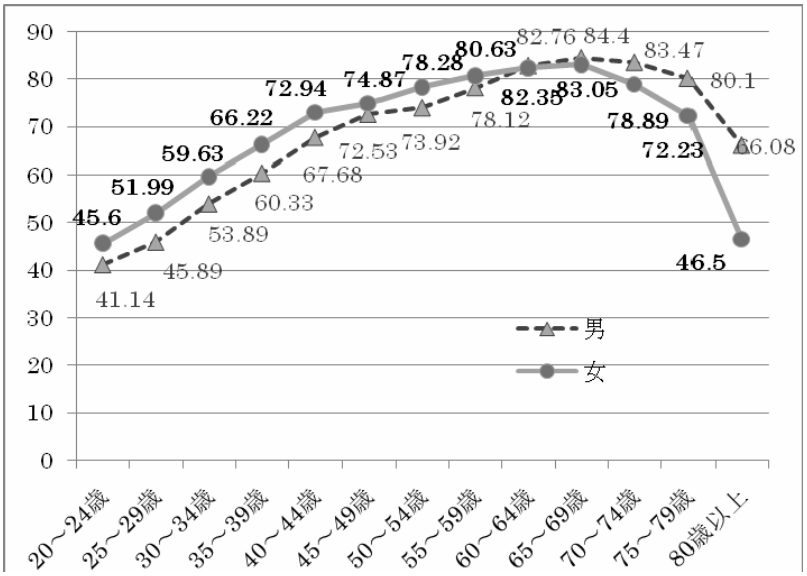
報告集は頒布価格７００円で希望の皆様にお届けします。　文責：地域と協同の研究センター　大島

データファイル

# 来るべき総選挙での世代別動向は？

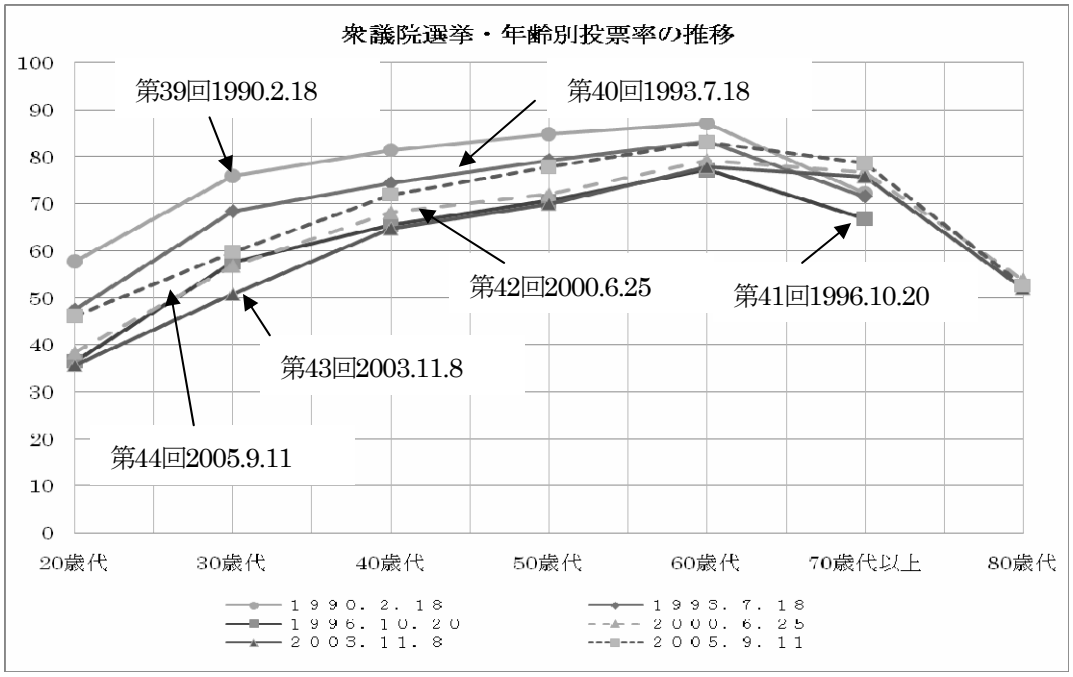
明るい選挙推進協会・「投票率いろいろ」より

第44回衆議院議員総選挙(2005.9.11)における年齢別・男女別投票率




世界的な経済危機のただ中にあって日本の国会は、政策か政局かで揺れていますが、早晩、解散・総選挙がおこなわれることは大方の予測となっています。

そこで今回のデータは、郵政民営化を焦点とした小泉首相のもとでの「劇場型選挙」となった2005年総選挙での男女別投票率を取り上げてみました。60歳未満では女性の投票率が男性を上回り、25歳～44歳以下では５％以上の差があり、女性の投票が注目されるのも当然。また世代別有権者数は、20-30歳代が32.9%、40-50歳代が33.6%、60歳代以上が33.5%。とくに75歳以上の後期高齢者(前回11.6%)の比重がさらにます次の総選挙でのシルバー・パワーのもつ意味は絶大です。




左グラフでは、総選挙投票率の年代別推移を第39回(1990年)から第44回（2005年）まで並べてみました。とくに選挙の度に投票率が落ちていた20歳代、30歳代も前回第44回選挙では回復しており、若者の環境や貧困問題への関心は投票行動にどう反映することになるでしょう。

ＩＮＤＥＸ

巻頭エッセー「せいきょう醤油」が意味するもの
元愛知学泉大学家政学部教授　井関道夫　1
「子どもと一緒にスローフードを見直そう」　2－3
フォーラム「生協職員の仕事を考える」報告　4
汚染米について聞く　野田輝己さん　5
『第1回研究奨励助成報告集』が完成　6
『2007年度地域福祉を支える市民協同パネル報告集』　7
情報ファイル　来るべき総選挙での世代別動向は？　8

2008年10月25日(偶数月25日発行)
定価200円
(税・送料込み。年会費には購読料が含まれています)
発行　特定非営利活動法人地域と協同の研究センター
代表理事　川崎直巳
〒464-0824　名古屋市千種区稲舟通1－39
TEL　052-781-8280　FAX　052-781-8315
E-mail　AEL03416@nifty.com
HP　http://www.tiiki-kyodo.net/